

『爆風のメソッド 陽だまりに吹く風[4]』

著：吉原理恵子

ill：緒田涼歌

「ねえ、高槻」

「……何？」

「共犯者になる覚悟、ある？」

いきなり思ってもみないことを問われて。

「は……？」

目が点になる。

今日一日、自分がどれほどヤキモキと神経を磨(す)り減らしていたのかも知らない
その口調がひどく癩(かん)に障(さわ)って。

「ふざけてんのか？ おまえ」

思わず、視線が尖る。

「違うよ。マジで聞いているんだけど。おれと共犯者になるくらいの覚悟、高槻にあるの
かなあ……って」

共犯者の覚悟？

それは——どういう？

口には出さず、目で詰(きつ)問(もん)する。

「おれも、いろいろ聞きたいことがあるから」

(なんだよ。そういうこと？)

それだけで、妙に納得できた。

つまりは、ギブ・アンド・テイク？

昨夜の真相を語る代わりに、高槻が知っている情報——主に一真関係だろうが
——と交換。そう言っているのだと。

思い返せば、昨夜もそうだった。

『千堂新家(ち)。この時間になっても、なんで誰も帰ってないの？』

神奈木は、一真のことは何も知らない。

高槻は、

『トホホな神奈木を俺様の華麗なトスワークで認めさせてやるぜッ』

それを公言——あくまで親友内でだが——するほどには神奈木フリークである。だから、神奈木が、一步間違えれば変態ストーカーもどきになるほど一真の情報に飢えていることも知っている。

一真と神奈木。どっちが重い？

それは、一真との友情に決まっているから、いくら高槻が直情型でも、ついうっかりで口を滑らせてしまうには抵抗感大なのだった。

(共犯者……なんて、いきなり御(ご)大(たい)層(そう)なこと言いやがるから、どんだけえ……とか思っちゃったじゃねーかよ)

——いや。

暴言・失言・迷言になりかねないことを平気で口にする日常が日常だから、ある意味、

非常に神奈木らしい言い様だとさえ思えた。

だが、今日一日、ヤキモキ・イライラさせられた手前、あっさり頷いてしまうのもなんだか癪(しゃく)に障って。

「おまえの共犯者になったら、俺になんの得があるわけ？」

ブスリと突きつける。

「んー……得なことはないかも。もしかしたら、高槻的には大幅なマイナス・ポイントになっちゃうかもしれないし」

万事が万事、ポジティブ系アバウト思考の神奈木にしては、えらく自信なさげな後ろ向き発言だった。

だから、高槻としては逆に勘繰りたくなかった。意味深に『共犯者』を持ち出すことで選択肢をチラつかせながら、その実、根本的なところでは高槻がこの問題に首を突っ込んでくるのを嫌がっているのではないかと。

そんな裏読みの深読みが正しいのかどうかはわからないが、ここまで来たら、高槻も引く気などさらさらなくて。

「——いいぞ」

きっぱりと口にする。

「いいの？ ホントに？ 後悔しても知らないよ？」

くどいほど念押しする神奈木を、

「共犯者になってやるから、とっとと全部吐け」

上目使いに睨む。

——と、そこに。

「洋風ハンバーグ定食とミックスフライ定食、お待たせいたしましたあ」

妙に気合いの入ったウェイトレスの声にタイミングを外されて、張り詰めた空気も一気に壊(たわ)んだ。

「んじゃ、とりあえず食う？ おれ、もう腹減りまくり」

「食いながらでいいから、話せよ。時間がもったいない」

本音である。

今日は、朝イチからなぜだか妙にタイミングがズれる。それで、何もかも後回しになってしまった。その結果として、今のこの状況があるような気がしてならない高槻であった。

「おれね、高槻。千堂のことが好きなんだ」

「——知ってる」

何を今更……である。

人目も憚(はば)からずに、あれだけ露骨に懐き倒しているのだ。

小柄な飼い主にかまってもらいたくて、千(ち)切(ぎ)れるほどにシッポを振りまくりの傍(はた)迷(めい)惑(わく)な大型犬(ワンコ)。

それこそ、全校で知らない者はいないと言っても過言ではない。

つい先日、神奈木との下ネタ絡みで三年生に嫌がらせをされて、逆に一真がシメ返した。小柄・ほっそり・女顔——の一真が予想外の大物ぶりを遺(い)憾(かん)なく発揮したことで、中学時代の悪名まで一気に轟(とどろ)き渡ってしまった。

なのに。当の神奈木には『ホモ疑惑』の欠片も出ないどころか、相変わらず女子には絶大な人気を誇っている。中ノ澤イチのタランという看板に偽りなく。

一方的に実害を被(こうむ)っている一真に絡むバカはいても、神奈木には皆無。
それって、どうよ？
——と思っているのは、たぶん高槻だけではないだろう。
そんな状況でも、しっかりと一本筋の通っている一真の言動は揺れもブレもしない。
タダ者ではない大物——と言われる所(ゆ)以(えん)である。
(なんたって、千堂は津寺とアイコンタクトで会話できる強心臓だし)
つらつらと思い出しながらエビフライにかぶりついた高槻は、
「それって、フツーに千堂とキスしたくなるほど好きってことなんだけど」

サラリと言われて。
「——え？」
思わず双(そう)眸(ぼう)を見開き。
「んで、キスしたら、本気で殴られちゃったんだよ」
その言葉の意味を反(はん)芻(すう)して。
ウソだろ？
マジかよ？
ありえねーッ！
高槻はエビフライをくわえたまま——絶句した。

本文 p54～60 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>